

目黒寄生虫館月報

昭和34年8月10日発行・毎月1回10日発行

第6号

昭和34年8月

内 容

岡崎常太郎氏来館	1
吉田博士から図譜寄贈	1
帆足延夫氏来館	1
寄贈をうけた標本	1
生物学同好会	1
カツオに寄生する橈脚類	
Caligus 属の2種について (桑原連)	2
目黒寄生虫館建設記録 (4)	3
パラサイト「ドクガの実態」	3

岡崎常太郎氏来館

7月21日岡崎常太郎氏が来館され、衛生昆虫について教示され。

吉田博士から図譜寄贈

7月24日吉田貞雄博士は多数の教材用図譜を寄贈され鞭撻された。

帆足延夫氏来館

7月26日「南方航路の採集記」(「新昆虫」所載)の筆者帆足延夫氏が来館され、南方の島々に棲息する昆虫類の話を面白く語られ、別掲標本の寄贈をうけた。今後、本館の資料蒐集に協力することを約された。

台湾から標本寄贈

高雄医学院謝猷臣教授は *Fasciolopsis buski* など3点(別掲参照)の標本を航空便で寄贈された。

寄贈をうけた標本

水産大久保伊津男教授 *Apocepon pulcher*
 観音崎水研四竈所長 *Schistocephalus* sp. ?

帆足延夫氏 ハジラミ(タヒチ島)
Athelges sp. ? (ダバオ)

高雄医学院謝猷臣教授

Fasciolopsis buski
Cysticercus cellulosae

ヒシ

小倉暁雄氏 *Cnidocampa flavescens* など

生物学同好会

7月19日福井玉夫博士ご指導のもとに逗子浪子不動海岸で採集会を行った。50点余の標本をえて極めて有意義であった。

7月の短信

- 1日——岩重博士を訪問、ヒフ炎を起す衛生昆虫展示について打合わせ(亀谷)。
- 2日——水産庁海洋第2課訪問(木原)。
- 3日——日本テレビ来館、ドクガの写真を撮る。
- 5日——朝日新聞伊藤昇氏来館。
- 8日——東京医歯大医動物学教室訪問(鈴木)。
- 9日——山下次郎博士来館。
- 10日——目黒区役所民生経済課から観光施設調査のため来館。目黒区公報に「ドクガの実態」展紹介。
- 13日——毎日新聞に「ドクガの実態」展紹介。
- 14日——「寄生虫予防」に竹本博士の目黒寄生虫館見学記掲載。東京医歯大医動物学教室訪問(鈴木)。
- 15日——東大伝研寄生虫部の殺虫剤班に野々部理事入会。
- 16日——江の島水族館訪問(鈴木)。
- 18日——帝都日日新聞に「ドクガの実態」展紹介。
- 25日——小田原水産生物研究所訪問(木原)。
- 26日——観音崎水産生物研究所訪問(木原)。

目黒寄生虫館建設記録(4)

28年秋から冬にかけて、石浜光君は芝浦屠場に何回も足を運び家畜寄生虫を採集した。

この年の暮、井上征五郎氏からミブヨモギの種子をもらった。これは葉草園で翌年の5月に芽をだして育てていったが、しばしばネキリムシにやられるのには閉口した。しかし切られた小枝が挿し木で育つことを知り、むしろ増殖に役立ったので約1坪のヨモギ畠が出来上ることになった。

29年4月北里講堂で寄生虫学会が開かれた。森下薫、北村精一、長野寛治、浅田順一、太田秀浄の諸先生にお会いしてご協力をお願いした。

4月19日いよいよ正式に開館した。このことが大阪の「寄生虫」紙38号に掲載されて送られてきた。森下博士のご厚情によるものと知った。

4月21日には77名という大量の入場者があり、私はこのささやかな事業も世の役に立つものであることを知り意を強くした。それからは毎日參觀者が絶えず、学校団体(田道150名、鷹番40名……)や区の教育委員会などの諸先生の来館をみるにいたった。職人風の人が熱心に質問したり、学生がノート持参で2時間余

もねばったりするようになった。私はますます勇気づけられたのであった。一方標本の蒐集も怠らず努めた。

5月11日石井みどり君は山梨に出張した。杉浦三郎、太田秀浄両博士のご援助で日本住血吸虫に関する多くの資料の寄贈をうけ、また殺貝現場の写真もとらせていただき、夜おそく目黒駅についたのであった。

また岩手県にでた牛蠅の幼虫(井上氏)、三島のモクスガニ、カワナナなど(肺吸虫症患者から)をえたり、綿馬を埼玉の児玉太満三氏から入手して移植したり、ザクロを植えたりした。

6月30日読売新聞に「引揚医師の悲願」と題して広く紹介された。

7月21日柏崎の渡辺昇蔵氏から8点の標本が送られてきた。

8月12日台北の王洛氏から航空便で数点の標本の寄贈があった。

8月の夏季休暇に信州大医学部の学生坂部長正、丹羽一成、沖山文雄の3君が来館して糸虫毒について小さな実験を試みた。3君は泊りこんだりして極めて熱心に実験を続けたのであった。

9月には、私たちが今日にいたるまで直接ご指導をうけている恩人の1人森下薫博士の来館をみたのであった。(亀谷)

7月8日夜、筆者は座談中に飛来したチャドクガに接触した。背後から左頬にとまられたので思わず指で払い落とし(この時左右の前腕に毒針がばらまかれたらしい)、直ちにセッケン水で洗い流した。約30分後、頬は異常なかつたが左右前腕一面にジンマンンが出た。猛烈に痒くなったが発赤はこなかった。「ムヒ」で痒感がとれたので就眠した。翌朝目覚めると再び痒い。赤い発疹が多数現われた。次第に胸、腹部へひろがる。無意識的にかきあげたのであろう。11日まで痒みは続いたが14日頃には大変楽になった。

これでも、ドクガに接触した直後にセッケン水で洗うと著るしく毒針を流すことができる。あとは対症的に塗布薬で痒感をとめるより仕方がないように思う。(亀谷)

月例展示・バラサイト第3回

『ドクガの実態』

内 容

1. ドクガの種類
2. ドクガの生態
3. ドクガの天敵と駆除
4. ドクガの被害分布記録
5. アオバアリガタハネカクシとアオカミキリモドキの被害

(8月30日まで展示)